

## 南方（ビルマ）

### ビルマ戦線の惨劇、 そして戦後

愛媛県 大澤 喜代太

私の家庭は、両親の下に兄が三人いて、私は四男でした。家族全員健康で、笑い声の絶えることなく楽しい団欒の日々でした。

家業は農業ですが、近隣の人達は大部分が小作農業で私の家は自作農業です。でも家族が多い関係で少しは小作も行っていました（小作農業とは大地主がいて、その土地を借りて作付けを行い、年貢を納める事を言う）。

親父は大地主の信頼厚く、小作人達の名代役を務めていた。区長や村会議員になりました記憶があります。近くに中山川という清流があり（源流は石槌山系です）小魚も多く、夏季は子供達の良き遊び場でした。また昔松山藩の殿様が参勤交代などで通られる街道で桜並木で「桜三里」と言っただ。至極長閑な環境で、人情味が濃く厚い村落だった。

小学校を経て旧制松山県立農学校（三年制）に進学しました。二年生の時に身体を痛め、一年間休学静養し、その後は勉学に精励しました。時に大東亜戦争勃発し、長兄が、ビルマのマンダレーにて戦死の公報が入った。当時は名譽の戦死だと世間で喧伝されていたが、両親の心中を察す

るに余りありだった。

「なれば俺が征つて仇討をする」多感な少年十七歳にして「心に誓う」特別志願を申告した。見事甲種合格となりました。「昭和十八（一九四三）年四月某日、博多に集結せよ」だった。約三百人位の同期生だった。

博多出帆、南支那の広東に上陸し、日本陸軍に接收されていた中国の中山大学を兵営として使用し、自分達三百人はここで現地初年兵教育を受け、第一期の検閲まで訓練の日夜でした。

検閲終了と同時に乗船を命ぜられ、船は台湾の基隆港に投錨しました。他の船舶が何隻か集結し梯団を組み、海軍の艦艇に護衛されながら、昭南島（現在のシンガポール）に入港した。そして第八師団（杉兵団）に配属された。

話が戻りますが、輸送船の中で輸送指揮官（官・氏名失念）から全員に通達があり「貴様達の中で下士官候補者はいないか、なると思う者は

挙手して官・姓名を名乗れ」で、自分が第一番に挙手をして「陸軍上等兵大澤喜代太」と大声で怒鳴るがごとく叫ぶ。「よし第一号」というような次第で、約三十人程度の下士官候補者ができた。船内の事項に付きましては（『平和の礎』の陸軍南方作戦に参加者の各記録にあり省略）。

なおこの時は、杉兵団要員だったが、シンガポール上陸と同時に同兵団を離れ、北方約一〇〇キロの地点にあるアクアルンプールの下士官候補生教育校に入り、約半年間余りの猛訓練を受けた。国内の学校と異なり外地の事です。すべてが戒厳中で緊張の連続でした。卒業後「原隊に追求せよ」だった。

同期生十八人（現在も「中山会戦友会」存続中）はビルマのマンダレーにある現隊に向かって一路北進に北進を重ねて、漸くマンダレーに到着しました。インパール作戦で破れ、退却あるのみ原隊だったが、これに合流した。その後もまる

で転属引受要員のごとく、転・配属が繰り返された。書類上のみと思うが、例えば第八師団（杉兵団）から第六師団（明兵団）さらに第十一師団（錦兵団）、第五師団（鯉兵団）等の輜重兵連隊（錦兵団）、第五師団（鯉兵団）等の輜重兵連隊（鯉兵団）等であったと記憶している。

なお、下士官学校出身であるために階級は下士官であるのが当然だが、転属ばかりしていたために、同期生十八人は、いつまでも兵隊だった。また輜重兵連隊が原隊ですが、すべて戦線における任務、行動、戦闘等々は歩兵同様で、匍匐前進・夜間の斬り込み、肉弾突撃等を敢行する訓練をさせられました。また、時には上官から「貴様達は何の兵隊と異なり、下士候出身だぞ」と気合を入れられ、「部隊の範たらしめよ」だった。

マンダレーから東北にあるラシオ等に活動範囲を広め、インパールよりの敗戦、転進（退却）の援護中隊として活躍しました。撤退友軍の悲惨な状態は、現在も心の奥に残っており筆舌には尽くせません。

現地の近隣にモチ鋤山があり、以前英軍が接収して鋤石の採取をしていた関係で、また諸設備が整備されており、それらの建造物も立派なものだった。またビルマの南岸（アキヤブ）からの引揚げ部隊の輸送援護も行った。その時点では同年同期生は三人だった。アキヤブやモチ鋤山等にて友軍を援護し、英正規軍及び現地ゲリラ遊軍等の攻撃を受けながら、第三中隊は終戦までよく頑張った。英正規軍と攻防戦の砌、敵の指揮官、佐官級を、三八式歩兵銃で狙撃射殺した。と同時に総攻撃を敢行、英軍は退却した。これを見てゲリラ部隊は大崩れで一目散に総退却をした。

この時に敵の陣地跡には、多くの食料品が残されており、ビスケット・クラッカー・バター・チョコレートなど、我々がいまだ口に入れたことのない戦利品だった。また敵は最前線には食料、弾薬等の輸送が困難なために、制空権を利用して、大型輸送機で落下傘にて諸物資を降下させていた。これを「ジーツと眺めている事は無

い」とジャングルを掻き分けて接近し、掠奪（横取り）に行った。その時の風の流れて、自軍の近くに落下した時は多分に収穫することができた。目出度し目出度しだった。

ある時、同期の片岡と自分と二人に自動車教育に行けと命ぜられた。不案内の地であったため道に迷い、黄色の法衣を着た人（仏教信奉者）に出会った。道を問うに、方向を示してくれた。数キロ進んだ時に、米軍機ロッキードが突如現れ、これに発見され、空から機銃の乱射を受けた。機は旋回して執拗に二度三度と攻撃してきた。二人は左右に分かれて走った。敵機は去ったが、先の道を教えてくれた僧侶は正しく正直者だったのだろうか？

この辺は敵のゲリラ部隊の巢窟とか。自動車教育終了で原隊のいるモチ鉱山へ帰る。部隊の移動命令が出た。部隊は「タイのバンコックに転進せよ。第三中隊は最後尾にて警備、収容しながら本隊に追従せよ」だった。後尾収容任務はいかに

至難な業務か当事者でない限り理解できぬ難事業でした。負け戦の退却です、戦傷病者を一人残さず引き揚げ、なおかつ後方からは、優勢な敵の追撃、ゲリラの夜襲等と対戦しながらです。中隊長以下全員が全力でその任務貫徹を行いました。他部隊の兵隊であっても全部面倒を見ました。そうした中にも力尽きて、まるで朽ち木の倒れるごとく行進中に崩れ絶命した戦友、道路の傍らに座したまま呼吸の絶えている友。まるで地獄図のごとくでした。

話が少し遡りますが、昭和二十年の正月前にモチ鉱山で治安維持警備中に、正月に餅を喰わせられぬかとのことで、戦友二、三人と相計り、近くの村落を物色して餅米を手に入れることができた。早速正月用として餅搗きをして全員に少しながら正月気分を味わってもらった。中隊長以下全員が喜んでくれた。中には涙を流していた戦友もいた。戦友会の語り草です。

自分はその夜の夢枕に次兄が現れ「俺は靖国街道を走る、子供を頼む」と異様な「夢枕」だった。心に強く深く刻み込んだ。五十有余年経過した今も、あの時の情景が目の奥に明瞭に焼き付いている。

イラワジ河・サロイン河・チンドイン河とこの三大河川がビルマの三大水流だ。我が第三中隊徒步小隊約五十人は、終戦命令の出るまで、この渡河地点において、全軍の撤退渡河作戦と銘打って活動した。大きくて頑丈な筏を二つ三つ作って、太いロープを対岸に渡して、これを命綱として各隊の兵員を輸送して、輜重兵本来の任務を敢行した。なおこの渡河点に辿り着いた途端に気の緩みかばったりと倒れて昇天された戦傷病者も多かった。

勿論、至る所で戦死者を見た。所に依っては「白骨街道」という位多くの戦死者があった。自分達は終戦命令の伝達されるまで、この河岸にて、友軍を搬送した。

ラングーンにおいて英軍に依る武装解除が行われ、昭和二十一年七月まで捕虜生活を送った。

それから十有余年後「ビルマの豎琴」という表題の映画ができた。あれは実在の物語ではなからうか。現在も半信半疑だ。一人の日本軍人が、多くの死者（敵、味方不問）や戦場戦禍に依って生命を絶たれた人々のために豎琴を弾じ、戦友の呼び声にも耳をかさず、黄色の僧衣を身にまとい、落ちて行く夕日を眺めながらラングーンの街はずれにて琴を弾ずる。人間なら、だれしもちよつと考えさせられる。

私自身も、長兄が戦死し、次兄も私がモチ鋤山で皆に餅を喰わせた時、あの夜の夢枕に立った時に「靖国街道を走る、子供を頼む」が戦死の時だった。

兄嫁も八月のお盆が過ぎたら実家へ帰る、子供は両親（祖父母）が引き取るとの話が着いていたという。私が七月に復員して来た事で事態は一変して、早速に親族会議を開き、子供のために兄嫁

は家にいてもらい、私が子供を養育する、そして姉さんと結婚する事で、万事丸く決着しました。私も兄の夢枕に対して責任が果たせたと思ひ心身共に一息ついた次第です。

さてビルマの豎琴もさることながら、大東亜戦争において、悲惨な光景は戦後も数多く見たり聴いたりしました。

復員して来た時には家の仏壇には自分の位牌があり、石塔が建ち、なんとした事だろうと思ひましたが、戦死の公報が入ったために、このような事が全国的に有ったのです。

独身者の場合は、戸籍の復活裁判で一件落着くという事になるが、妻帯者の場合、まして子供のいる状態で、もし戦死の公報が誤って発表されたら、想像するだに悲惨な状態になります。そのような事を想い起こしても、二度と戦争なき事を祈ります。